



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン (E-mail : daimao@travelmitra.jp)

ぼん子画

(570-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

「インド芸能の世界 with 人間国宝」②

—The time has come—

彼女はわが輩の期待を裏切って“女学生”ではなかった。しかも既婚者で夫同伴の来日であった。「携帯電話を購入したいけど、困ったときは相談にのって下さい」もちろんと返答したもののわが輩の出る幕はないようだ。事実携帯電話についての相談はなかった。「どこの大学に留学しているの？」
「国際日本文化センターです」

これにも驚いた。彼女は留学生ではなく、研究者であった。名前を聞いてさらに驚いた。彼女の姉が来阪したとき理系教授とわが輩の三人で会食していた。急激に親近感が増した。

そもそも、なぜ彼女は日本語が巧みなのか。東京での留学経験があった。今回の来日は博士論文を仕上げるための予備調査であった。テーマは「日本のことわざ」である。われら日本人がことわざをどれだけ知っているか。その意味をどの程度理解しているか。またその理解の変遷などについてである。

たとえば、「犬も歩けば棒にあたる」のことわざがある。

われらの凡俗（ぼん子）の理解はこうだ。

「犬でも歩けば棒にあたるのだから、とにかく歩いていると、何か食べ物にあたる」

わが輩の理解はこうだ。

「酔っぱらってふらふら歩いていると電柱に頭をぶっつける。ご注意を！」

もともとの意味はこうだ。

「犬がのろのろと歩いていると棒でたたかれるのがオチだ。じっとしていなさい」という教訓である。

それはそれとして、広範な調査をどのようにするのか。日文研の教職員だけでは手が足りない。インテリへのアンケート調査はそもそも意味がない。彼らは正解を知っている。

(わが輩の出番だ！)

大衆の代表者わが輩には広範な友人がいる。立ち飲み仲間、その辺の主婦たち、さまざまな層からアンケートを収集し、その数三百人に及んだ。

そうそう、思い出がある。

わが輩は毎年プルニマ会編集長のお宅（亀岡の禅寺）にお邪魔して竹の子を掘っている。それに彼女とダンナを誘った。たまには身体を使うのがよいだろう。特にダンナが退屈しているのではないか、

と気遣った。

インド人は竹の子を食べるのか。竹の子カレーはあるのか。わが輩はインド放浪時代に竹の子を食べたことがない。彼女は持ち帰った竹の子で、カレーを作ってみると言っていたが、どのようなものだったのだろうか。

王舎城にはブッダの竹林精舎があるが、バンブー（竹）というよりはブッシュ（根元から多くの枝が群生している低木）である。食べられるとは思えない。

ならば、インド人は竹の子を食べないのか。この問いに、彼女はうう～んと唸ったあと答えた。「たしか東インドでは食べる、と聞きました」

隣国ミャンマー近くの州では食べる習慣があるらしい。

彼女が帰国するとき、わが輩に言った。文化訪問団をつれてベンガルの大学に来て下さい、と。タゴール生誕百五十年祭（2011年）のときも誘われた。この時はまだ機が熟していなかった。

旧知のベンガル研究者から日本での生誕祭企画の助力を頼まれた。このときも忙しくご縁がなかった。実は彼がカルカッタ日本語学校での彼女の恩師であった。

横道にそれるが、ベンガル地方の心象に触れたければ、彼が翻訳した次の本を開いてほしい。短編集なので読みやすい。

『船頭タリニ』（現代インド文学選集、めこん社刊）

ベンガルの風景と愛妻家タリニの人間の本質が衝撃的に描かれている。

The time has come. (機が熟した)

わが輩は早速、打診のメールを送った。

「文化交流のため大学訪問を立案中だが、可能でしょうか」

数日後に彼女から返信があった。

もちろんウエルカムの返事が来た。

(I would be happy to arrange a cultural exchange programme. Please share your ideas also)

これでタゴール関係の企画が成り立ちそうだ。

わが輩は当初小規模の交流を考えていた。例えば音楽部教室で教授や学生と交流する、等々である。ところが、読者諸氏よ、わが企画は次々に思わぬ方向に展開しだした。

わが輩は笑うのか、苦悩するのか。次回に語ろうではないか。読者諸氏よ。